

エーエンの原っぱ



電車の揺れがやけに気持ち良かった。そのせいでついうとうとしてしまい、はっと気づいた時には乗り過ごしていた。

まあ、いいか、どうせ、急いで行かなくちゃいけないところなんてないんだ。僕は投げやりな気持ちになって、窓の外へ目をやった。そして思わず腰を浮かせた。

後ろへ流れていく景色にはっきりと見覚えがあった。子供の頃、電車の窓から見た景色とまるっきり同じなのだ。そんなはずはない。あれからいったい何年たっているというのか。それでも僕は、あの頃と同じ駅で電車を降りるという誘惑には勝てなかった。

「そんなばかな……」

駅前の風景は僕が子供の頃と何一つ変わっていなかった。おいしいお団子を売っている売店も、煤けたような酒屋さんも、あの頃のままだった。

「と、いうことは……」

僕は次第に走り出していた。この道もあの道も全部覚えてる！ そうだ、この黒い板塀の角を曲がると、川があるんだ。赤い欄干の小さな橋を渡って、石ころだらけの道を行くと、こじんまりした四つ角に出る。左へ行くと小学校、右へ行くと幼稚園だ。

急に走ったせいで脇腹が痛い。埃の舞う四つ角で、膝に手を置いて呼吸を整えた。

「いったいどうなってるんだ……」

まったくわけがわからない。わからないが、どうやらここは「あの頃」らしい。だとしたら、僕にはどうしても行ってみたいところがあった。

四つ角からずいぶん距離があると思っていたが、たいしたことはなかったらしい。少し歩くと左手に雑草の生い茂る原っぱが見えてきた。

「あった……」

あまりにあっけなく、あの場所に立っていた。子供の頃、時間がたつのも忘れて毎日のようにこの原っぱで遊んだものだ。恐る恐る足を踏み入れてみる。

道路に近いところは踏みしだかれて地面に貼りついたようなシロツメクサやカタバミ。他にも未だに名前を知らない草花が夏の盛りのように生い茂っている。その奥には茅というのか、細長い草が群生している。あれを結んでよく毬を作ったものだ。いったい何を捕まえるつもりだったのだろう。ススキも鋭い両刃の葉を猛々しく広げている。僕は夢中で奥へ踏み込んでいった。

おかしい、と気づいたのはだいぶたってからだった。子供のころは広いと思っていたが、本当のところはごく狭い土地だったはずだ。それなのに、歩いてても歩いてても終わりがなく、あちこちの魅惑的な草むらが僕を誘う。僕は帰ることをすっかり忘れて、永遠の原っぱに飲み込まれていった。

そのバスに乗るのはずいぶん久しぶりだった。駅から大学までのバス。もっとも学生の際は学校の近くに住んでいたから、そんなに乗ったこともなかったのだが。

終点の「大学前」で下りてしばらく立ち尽くしてしまった。

変わってない。あの頃のままだった。変化は古びた校舎にからまっている蔦が濃くなっているくらいか。いや、学内が狭くなっていないか？あそこはもっと広々していたような気がするが。

それが自分の錯覚だと気付くのにはたいした時間はかからなかった。あそこはここが世界の中心であり、自分の世界のすべてだったのだ。広く感じるのも無理はない。気を取り直して待ち合わせ場所へ向かった。といってもバス停からほんのわずか離れたところで、ベンチもなにもない、ただ1本のけやきが立っているだけのところだ。

なぜこんなところだと思うだろう。それはこの話を彼が言い出したのがこのけやきの下だったからだ。「10年後の今日、ここで会おう。たとえ2人がそのとき別れていたとしても」ふいに彼がそう言った。

どうしてそんな話になったのか今ではもう思い出せない。私たちはまだ付き合い始めたばかりで、毎日が楽しくて仕方なかった時だ。別れることなんてこれっぽっちも頭になかった。だから、10年後に会おうと言われても「一緒にここへ来るんだ」くらいにしか思わなかった。「たとえ別れていても」と彼が言ったのはただの言葉のはずみだと思っていたのだ。

彼はそうではなかったのだろうか。別れることをどこかで想定していたのか。人の気持ちのよさを予感していたのかもしれない。

私の方は、彼の言葉になにかしらロマンチックなものを感じ、たいして深く考えもせずに同意した。彼は「絶対だぞ」と何度も念を押した。「絶対だよ」私はそう返した。そのやりとりすらも、恋する2人のじゃれあいにはしか思えなかった。

それから2年ほどして、私たちは別れた。原因はもう思い出せない。どちらかが心変わりしたのかもしれない。さよならをするときに彼が「でも10年後には会おう。絶対に」と言った。私は泣きながらうなずいた。

あれから8年。今日がその10年後の約束の日なのだ。

8年もあればいろいろ変わる。私も彼も、それぞれ別の人と結婚した。

彼は来るだろうか。私の相手は変わったけれども一度も約束を忘れたことはなかった。毎年その日が来ると「あと何年」と数えていたのだ。

もうすぐ約束の時間だ。本当に彼は来るのだろうか。

自分だけのルールがあるんだ、と彼女は言った。

いつも履いているスニーカーから水が浸みてきたとベソをかいたような顔でつぶやいていたから、「新しいのを買えばいいじゃん」と何気なく言ったのだ。僕にしてみたら、そんな愚痴を言うひまに買いに行けばいいだけのことだから。すると彼女はきっぱりと首を横に振った。

「まだだめ」

「まだ、ってどういうこと？　まさかもっとボロになってからしか買わないの？」

僕は冗談だと思っていた。だって靴底が破れて水が浸み出てきてるようなスニーカーだよ？　ふつう即買い換えるだろう。

「このスニーカーを買うのは年末って決めてるの。で、それを履くのは年が明けてからなんだ」

僕の顔は中途半端な笑顔で固まっていた。彼女の言ってる意味がよくわからなかった。

「え？　え？　どういうこと？　今穴があいてるんだよね？　でも買うのは来月なんだ？」

「そう。そういうルールだから。まあ、自分だけのもんなんだけど守らないと気持ち悪いんだ」

それから彼女は自分のルールについて教えてくれた。

曰く「朝は必ずトーストとコーヒー」　うんうん、それはまあわかる。

曰く「アイスコーヒーを飲むのは6月になってから。それまでは絶対飲まない。あと夏が終わってアイス用の豆がなくなったらそのあとはもう絶対飲まない」　ん？

曰く「衣替えをしたら前の季節の服は絶対着ない」　じゃあ肌寒くても半袖？　暑くても長袖？　「そうだよ」

曰く「財布の中のお札を入れる順番が決まっている」　なんかのジンクス？

曰く「喧嘩したらもうそれで終わり」　ふう～ん、あっさりしてるんだ……ってちょっと待てよ。

「仲直りとかしないの？　喧嘩ってお互いをよく知るためにするんだろ」

「そういうのよくわかんないんだ。喧嘩したらお互いにいやなこといっぱい言うでしょ？　それをチャラにしてやり直すってことが信じられないの」

僕は初めて真剣になった。それまでのルールはまあ、彼女のちょっとしたこだわりってことで笑ってやり過ごせる。でも最後のルールは困る。それじゃあ言いたいことも言えやしないじゃないか。

「ルール変更っていうのはないの？」

彼女と僕は付き合いだしてまだ2か月しかたってない。今のところ喧嘩はしたことがないが、これから先絶対喧嘩しないということはないだろうと思う。

「んー、どうかなあ」

無邪気な彼女の顔を見ながら、僕は僕のルールを思う。こういうときは答えを出さない。半永久的な保留だ。彼女のきっぱりしたルールに比べるとてんで情けないけどね。

一言でいえば、彼は「自信のない」男だった。育ちのせいなのか、生まれつきの性格なのか、何をやっても「これでいいのだ」と思えない。

「すいません。コピー取ったんですけど、これでいいでしょうかね？」

「すいません。報告書書いたんですが、これでいいんでしょうか」

「すいません。始末書の書き方はこんなふうでしたか」

「すいません。今お弁当食べてもいいでしょうか」

日常生活のすべてに自信がなく、何につけてもすぐに人に聞くのだ。周りの人間も、はじめはそれなりに答えているものの、あまりにもしつこく聞いてくるし、またその聞いてくる態度が自信なげにオドオドしているので、次第にイライラしてくるのであった。

彼は毎日びくびくと人の顔色をうかがい、自分の行動について他人に指示してもらって生きていた。何一つ自分で成し遂げることもなく、それゆえ自分に自信をつけることもなく過ごしていた。

あるとき、仕事で大きなミスが発生した。会社の経営基盤を揺るがしかねないような大きなミスだった。直接ミスを犯したのは彼だった。書類に書き込む数字を一ケタ間違えたのだ。彼はその数字を書き込むときに例によって周りの人間に確認を取っていたが、書類に何か書くときにいちいち確認を取りに来ることで、聞かれる側の人間がうんざりしていたのは事実である。

とにかくミスが発生し、最終的には彼が責任をとって、というかとらされて会社を辞めなくてはいけなくなってしまった。

彼はひどく嘆き悲しみ、彼にしては珍しいことに誰にも相談せずに首をつってしまった。

気がついたとき、彼はぼんやりと白く煙った世界にいた。霧が立ち込めているようだ。自分の身の回り1mほどしか視界がない。彼は自分が立ったままなのに気がついた。首が痛いような気がする。

「いったいどうなっているんだろう。たしか首をつったはずなんだが……」

彼はやや伸びたような気がする首をひねり、ゆらり、と歩き出した。

「私は死んだのだろうか。それとも助かったのだろうか。助かったにしては景色が変だし、死んだのならなぜこんなところにいるんだろう。わからない……」

彼は自分がどうなったのか皆目見当がつかなかった。それで、以前と同じように誰かに聞こうと思った。

しばらくそこにたたずみ、人が通りかかるのを待った。待つのは苦にならなかった。

やがて向こうから誰か歩いてきた。彼は急いで駆け寄り声をかけた。

「あの一、すいません。私って……」と言いかけたとき、「ぎゃー！」とものすごい声をあげてその人は走り去ってしまった。後に残された彼は途方に暮れた。まだ質問していないのに。次の人もその次の人もみんな、恐ろしい声をあげて逃げて行った。

「なぜみんな逃げていくんだろう。もしかして私はお化けになったのかなあ」

そのことを聞いてみたいのだが、だれも答えてくれない。
今でも彼はその場所に立って、質問を繰り返していると思う。

だしぬけに猫がニッと笑った。

いや。

笑っているように見えた。猫でも笑うんだな。オレは案外冷静にそう思った。

猫は前足を揃えて座っている。もう笑っていない。小首をかしげてこちらを見ている。

「おい、何見てんだよ」

ニャアと鳴いて猫は、プイと横を向いた。そうして脇腹のあたりをちょっとひと舐めした。

深夜、面白いテレビもなくてぷつんと消したら、部屋の中にねっとりした静寂が広がった。蛍光灯の白い光がやたら眩しかったのでダウンライト一つにしたら、部屋のあちこちに妙な影ができた。どこかしら不穏な感じがする。そんな怪しい雰囲気の中で奴が笑ったように見えたのだ。

奴はまたこっちをじっと見ている。まん丸な瞳を、ちらちらと訳ありげな表情が横切る。

「こっちへ来いよ」

その呼びかけに応えるかのように立ち上がり、2，3歩歩く。オレは奴を驚かさないようにじっとしていたが、急にのどのあたりがむず痒くなってきた。

しばらくこらえていたがどうにも我慢できなくなって、ゴホン、とやってしまった。

奴はビクッと体を震わせて後ずさりした。まん丸目玉は警戒心でいっぱいだ。

かなり下がったところで立ち止まり、また腰をおろしてこっちを見ている。横にあった柱に頭をこすりつけ、横目で俺のことをうかがう。

ニャア、とオレも鳴いてみた。

奴は知らん顔をしている。そっぽを向いたまま、あたりの様子を気にしている。耳がピクピクしていた。

そんな奴の様子をぼんやり見ているうちに眠くなってきた。

「おい、オレはもう寝るぞ」

そう言って寝室へ向かおうとした。すると奴は、オイオイ、マダネルナヨ、といった感じで近寄ってきた。

「なんだよ」

足を止めて奴の方へ向き直ると、ぱっと逃げた。

しかし、オレが歩くとまたついてくる。3回目に奴が逃げたとき、オレは諦めてそこへ腰をおろした。「起きてりゃいいんだろ」

奴は、ナンノコトデスカ、というふうに、前足で顔を洗った。

猫とのにらめっこには根気がいる。まもなくオレは睡魔に襲われ、目を開けているのもつらくなってきた。仕方なくやつに白旗をあげることにした。

「ほんとに寝るぞ」

ニャア。

奴は一声短く鳴いて立ち上がった。そしてやけにあっさりと自分の寝床へ帰って行こうとする

。思わず「なんだったんだよ」とつぶやいてしまった。

すると、向こうを向いて歩きだしていた奴がフッと振り返り、
「なんでもねえよ」

そう言ってニッと笑った。

大災厄の後に

防衛軍本部は喧噪を究めていた。各地から次々に悲痛な報告が飛び込んでくる。

「西部地区、全滅しました！」 「南部A地区、壊滅状態です！」 「避難が間に合いません！」 「北部C地区、炎上……（ブツッ）」

総司令官は眉間に深いしわを刻み込み、唇をぐっとかみしめたまま、それらの報告を聞いていた。本部内を部下たちが引きつった表情で走り回っている。

「……もはや、これまでか……」

宇宙からの見知らぬ敵が突然攻撃を仕掛けてきたのは1週間ほど前のことだった。なすすべもなく、地球上の5分の4が破壊されてしまった。残った者たちが集まり、急ごしらえではあるが、「地球防衛軍」を組織した。子供むけの特撮ドラマに出てくるようなネーミングを笑うものはだれもいなかった。本当に地球の危機だったのだ。

とはいえ、何をどう防衛すればいいのか、それを知っている者もいなかった。宇宙からの攻撃は圧倒的パワーで地球に襲いかかり、人間が構築したあらゆる建造物を破壊しつつくした。気がつく都市がひとつ消滅している。また気がつく国がひとつ消滅しているという具合だった。

防衛軍の中に歴史学者がいた。彼は過去の文献（攻撃をкаろうじて免れたもの）をひっくり返し、この攻撃が数万年に一度というスパンで繰り返されてきたことを知った。理由も、誰が攻撃してくるのかもわからなかったが、この地球は過去に何度も同じ目にあい、そのつど奇跡の復興をとげてきたのだ。

「この攻撃を防ぐことはできません。我々は座して敗北を待つのみです」

歴史学者の言葉に総司令官は、悔しそうに肩を震わせた。

「むざむざとやられてなるものか。いつの日にかきつと復讐してやるのだ」

「そのためには、必ず誰かが生き残らなくてはなりません」

総司令官はカッと目を見開き、歴史学者を睨みつけた。そして唸るような声で命令を下した。

「なんとしても攻撃を逃れ、生き残るのだ」

開始と同じように、唐突に攻撃が止んだ。急いで生き残りの状況をさぐる。各地から息も絶え絶えの声が届く。「南部B地区、わずかですが生き残りがいます」「東部、なんとか無事です」「北部B地区、まだ生きてます！」

「そうだ。みんなで力を合わせて復活するのだ。我々はまだ滅亡したわけじゃない！」

総司令官の言葉に、全員が雄たけびを上げた。

「ずいぶんさっぱりしたわね」

「そうね。夏の間にかなり茂ってたから。やっぱりこの時期には草刈りしてもらわないとね」

雑草がきれいに刈られた空き地の前で主婦が立ち話をしている。足もとにはたくさんのバッタ

。

落ちた犬を叩け

『犬』が水に落ちたらしい、という情報は、瞬時に世間をかけめぐった。追いかけるようにして、今回落ちた『犬』についての詳細な情報が飛び交う。

今回水に落ちたのは、ここ数年音楽業界に君臨してきた大物だった。彼は作詞作曲はいうに及ばず、自らもバンドを率いて歌を歌い、また数多くの新人アーティストをプロデュースしてきた。その業績は大変なもので、歌は大ヒットして常にチャートの第1位を独占し、プロデュースしたアーティストたちは大活躍をした。彼は大金を手にして豪華な暮らしを手に入れ、周りも彼の恩恵を十分に受けていた。

しかし、「オゴレルモノハヒサシカラズ」という自然界の掟によって、その『犬』も水に落ちてしまった。きっかけはケチな詐欺事件だったが、人々の隠れた嫉妬心によって事件は次第に大きくなり『犬』は追い詰められた。そしてとうとう水に落ちてしまったのだ。物見高い人々は一目「落ちた『犬』」を見ようと、メディアに群がった。そして晴れ晴れと笑いながら『犬』を叩いた。

落ちてしまった『犬』はどれだけ叩いてもいいのだ。時々『犬』を弁護する人も現れたが、そういう人は『犬』と同じように叩かれた。テレビ新聞雑誌などあらゆるマスメディアはこれでもかこれでもかと情報を流し、ネットでは一般市民が目を取り上げて『犬』を攻撃した。

水に落ちる『犬』は一人ではなかった。毎日どこかで、スケールの大小はあるけれども『犬』は落ちていた。その数はあまりに多いので、ちょっとしたことならみんな見て見ぬふりをすることもあった。また、落ちる『犬』にもいろいろあった。叩かれてそのまま沈んでしまい二度と浮かび上がってこないもの。叩かれていったんは沈んでしまうが、いつの間にか浮上して何食わぬ顔で社会へ戻っていくもの。叩かれるたびに抵抗し、そのせいでいつまでもいつまでも叩かれてしまうもの。殊勝な顔で叩かれているが、それが終わったとみるやすばやく水から上がり、涼しい顔で水を振り払って得々としているもの。これが一番利口なやり方かもしれない。叩く方は叩いたことなどすぐに忘れてしまうから。

今日もどこかで水に落ちた『犬』が叩かれている。

叩く理由はマスコミが与えてくれるから、安心してみんなと一緒に叩けばいい。

便乗して何かしようとするならやりすぎないことだ。あまり目立ったことをすると今度は自分が『犬』になってしまうよ。

プルルル。「はい、こちら消費者センターでございます」

「ちょっと。あの矢場居製菓のガム。あれ危ないじゃないの。子供の口の大きさとおんなじだもんだから、うちの子のどにつっかえさせちゃったのよ。どうしてくれるのよ」

「もしもし。ガムですか。あれは噛むものですから、大きいままで口の中にあるってことはないと思うんですが」

「うちの子はしばらく口の中で転がしてから噛むのよ。そしたらこないだウツて…。子供が食べるものなのにあんなに危ないものを売るなんてどうかしてるわよ。製造中止にしろさいよ」

「わかりました。企業の方へ注意をしておきます」

「絶対製造中止にさせてよ。」ガチャ。

プルルル。「はい、こちら消費者センターでございます」

「あの一ですねー。うちの孫がですねー。飴玉をのどにつまらせましてですねー。それで危ないな〜と思ってお電話したわけですがー」

「飴はよく喉につまるんですよえ。気を付けていただかないと」

「それでもですねー。子供の喉の大きさっちゅうもんを考慮に入れてですねー……」

「はいはい。わかりました。えーとそれはどこのメーカーさんですか」

「えーと、うちはいつもいろいろ買うんで、どこっちゅうのはないんですわ。飴玉業界の方に言って、なんとかしてもらえませんかねー」

「……わかりました。なんとかしてみます」

「申し訳ありませんねー」ガチャ。

ほんのちょっと電話が途切れた隙に、隣の同僚に話しかける。

「なあ、こんなになんでもかんでも製造中止にしちゃっていいのかなあ」

「でも、対象はほとんどが嗜好品だろ。なくてもどうにかなるものだし、やっぱり人が死んだりするのはよくないからねえ」

俺が記憶している限りでは、最初の規制はタバコだった。がんの原因になるとか周りの人間に迷惑だという理由で、はじめは分煙とかいっていたがそのうちに強制禁煙になった。今ではタバコを持っているだけで逮捕されてしまう。

その次が酒だった。弾圧された愛煙家たちが「それなら酒も取り締まれ」と声を上げ、ついには昔のアメリカも真っ青の禁酒国家になった。

抗議の声は「だって健康で長生きしたいでしょ」という意見につぶされた。「健康で長生き」することが至上命令となり、とにかく命を脅かすものについては厳しい視線が注がれるようになったのだ。人々は健康になり長寿になった。しかし長い人生の時間を埋める嗜好品はない。暇を持て余した人々は競って消費者センターに電話をかける。あれが危ない、これは危険だと次々に指摘するのだ。

そうやって、極力危険を取り除いた、安全な長寿国になっていくわけだ。それにしてはみんな

の口調がとげとげしいのが気になるが。

週末の予定

「今度の土曜日さあ、1泊でどっか行こうよ」

あたしの部屋のいつもの場所に座って、彼が言う。付き合って3年目。お互いにもう慣れ切っていた。

「どっかってどこよ」

「どこでも。おまへの行きたいとこでいいよ」

またこれだ。提案だけしてあとは丸投げ。付き合い始めのころは彼がプランを立ててくれたりしたけど、あたしが何回か文句を言ってからはすべてあたしに任せるようになっていた。あたしのプランに彼が文句を言うことはないんだけど……、なんだか最近疲れてきちゃったな。そろそろ終わりどきのかなあ。この週末の旅行でなんらかの答えを出した方がいいのかも。

「猶予はあと3日しかない」

某国の首相は追い詰められていた。追い詰められすぎて、若干精神の平衡を欠き始めていた。

「あと3日で、現状を打破しない限り、人類に未来はない」

首相官邸の奥に作られた秘密の部屋で、首相は一つのボタンを見つめていた。厳重にシールドされた、単純極まりない円形のボタン。しかしこれは全世界を4回は滅ぼすことができるといわれている最終兵器の発射ボタンなのだ。

「現状を打破しなければ人類に未来はないが、現状が打破される可能性もない」

ボタンを見つめる首相の額からはじわじわと脂汗がにじみだしていた。

「もはや、このボタンを押すしか手段は残されていないのだ。しかし……私はあと3日待つと言った。自分の言葉には責任を持たねば。そうだ、だから、このボタンを押すのは今週末にしなければならない」

「やあ、なんだか憂鬱そうだね」

仲間の神様がやってきて、地球担当の神様の手元を覗き込んだ。分厚い手帳には、びっしりと予定が書き込まれている。

「まあね。何度やってもこの仕事は好きになれないよ」

地球担当の神様はため息をついた。

「仕事だからねえ、しかたないことなんだけど」

そうやって神様は手帳に「終末の予定」を書き込んだ。

何か月も鳴ったことのないインターフォンが音を立てた。細くドアを開けてのぞいてみると、友人のSが立っていた。

「よう！」という声が今までに聞いたこともないような明るさだ。いったいどうしたのだろう。ずっとウツで苦しんでおり、何度も「死にたい」と言っていたようなヤツが。

部屋にあげて、話を聞いてみることにした。その時点で俺にはある程度予想はついていたのだが。

案の定Sは開口一番「行ってきたよ。ついに」と言った。

「そうか。ついに行ったのか。で、ここにいるということは、気が変わったということだな」

「まあ、そういうことだ。気が変わったというより、生まれ変わったような気分だよ」

Sは上気した顔で言った。

「実に晴れ晴れとしたい気持ちだ。もっと早く行けばよかったよ」

Sは何度も「早く行ってみろよ」と言って帰って行った。俺は部屋の隅にうずくまりじっと考えた。生きている意味、価値、今までの人生を棚卸しして、じっくり検討した。そして朝日がさしこんできたとき、ようやく心が決まった。「よし、行こう」

俺が向かった先は政府公認施設の「自殺センター」だ。正式名称は別にあるらしいが、みんな「自殺センター」と呼んでいた。

2XXX年、増加する自殺者への対応に頭を痛めた政府はついに思い切った政策を打ち出した。「自殺者の臓器等の有効利用に関する法律」が施行され、各地に自殺センターが建設された。自殺したくなった人間は必ず自殺センターへ赴き、合理的に死を迎える。そして移植可能な臓器はことごとく摘出し、移植手術を待つ人の元へ届けられるのだ。勝手に死ぬと、とんでもない罰が待っているという噂もある。

センターに着くと、受付のきれいな女の子が笑顔で迎えてくれて、感じのいい職員が案内してくれた。説明をしながら、要所要所で確認してくる。本当に死にたいのか、死んでもいいのか、ということを段階を追って聞いてくれるのだ。当然、説明を聞いているうちに気持ちが変わる者もいる。Sはそうだったようだ。死んでしまうこと、が実感を持って迫ってくるので、思いつめていた気持ちがどこかへ行ってしまふのだろう。

「この先はもう戻れません」職員が言った。俺はにっこり笑ってうなずいた。

「かまいませんよ。俺はやっと生きる意味を見つけました。こんな俺でも誰かの役に立てるってことがわかって、ホントにしあわせです」

明日はあちこちの病院で移植手術が行われるだろう。

成功を祈る。